

## モノクロ世界 妙なる陰影

米写真家アダムスの技法継承  
自然が見せる美しい階調を一  
枚に

中島 秀雄

モノクロ写真はどんな色鮮やかな世界も白と黒で写し出す。その表現力は最新の高画質カラープリントにも決して劣らない。もっとも同じ白でも、雪と雲が同一では質感を表現できない。そこで、私はモノクロ写真を撮るとき、米国の高名な写真家アンセル・亚当ス(1902~84年)らが考案した「ゾーンシステム」を参考にしてきた。



湖面と氷、雪の質感を焼き付けようとした  
(2000年ごろ、米ヨセミテ国立公園)

ゾーンシステムは、モノクロの微妙な階調を再現するため、アダムスらが41年に開発した写真の露出や現像などを決める手法の一つだ。最も暗い完全な黒から最も明るい純白までを段階にして、撮影する際の指標として使う。

私は95年に「ゾーンシステム研究会」を設立して以来、普及啓発に取り組んできた。研究会では月1回会員が撮った写真を講評し、年2回撮影会も開いてきた。基礎から応用まで身につくように指導する。

アダムスの技術書では11段階に分けているが、一般には10段階が多く、私も10段階で撮影している。アダムスは生前に「写真は偶然のできごとではなく、それは概念(コンセプト)なのである」と語っていた。写真表現の本質は被写体そのものではなく、写真家のイメージや概念にあると考え、それを正確に表現するために考案したのがゾーンシステムだった。

彼は自身の写真術を書物に残し、普及させることにも熱心だった。私はアダムスの手法と考えに共鳴し、日本でも広めたいと考えたのだ。

2000年ごろ、アダムスも撮影に訪れた米カリフォルニア州ヨセミテ国立公園に会員と出向き、撮影会を開いた。雄大な渓谷に、水しぶき

をあげる滝や河川、美しい風景に胸が躍った。大型カメラと機材計15kgの荷物を抱え、起伏の激しい道を3kmほど歩いて撮影スポットへ向かった。

撮影場所は標高が高く、6月なのに湖は凍り、残雪がある。三脚を立てる前に、この風景で何を強調したいか考える。「残雪はオフホワイトに近いからゾーンはVIIIかな。氷はVI〜VIIIがよさそうだ」と計算し、頭の中でいったん写真をビジュアライズ(映像化)してみる。後は微調整でイメージ通りの写真が撮れる。

風景よりも屋内の方が難しい。同じカリフォルニア州のボデイ州立歴史公園にある小屋の撮影には大変苦労した。

19世紀のゴールドラッシュでは雑貨屋として営業していた歴史的に貴重な建物なので中に入れず、窓ガラス越しの撮影になる。屋内にはあまり光が差し込まず、手前は明るい、奥は暗い。白い布袋や影など被写体のゾーンを入念に測った。イメージしてシャッターを切ったが、窓ガラスの反射などでうまく撮れない。結局、3度渡米して、ようやく納得できる1枚を撮ることができた。

05年にはアダムスの息子さんに会いに行った。明治から昭和にかけて風景画のジャンルを切り開いた洋画

家・版画家の吉田博と、アダムスはヨセミテ国立公園を通じて交流があった。息子、孫の代になっても交流は続いているという。博画伯の孫の隆志さんが紹介してくれ、研究会の会員10人をアダムス家に招待してもらった。

息子のマイケルさんは気さくな人だった。私が「いつかアダムスの作品展覧会を日本で開きたい」と伝えると「是非やつてほしい。私がつけている作品を貸してもいいよ」と喜んでくれた。タイミングが合わず実現できていないが、この夢は必ずかなえたい。

コロナ禍のトンネルを抜けた後にはどんな景色が広がっているのだろうか。再び屋外で気兼ねなく撮影できる日を心待ちにしている。(写真家IIなかじま・ひでお)

日本経済新聞  
2021年3月31日